

## 第10回「知床遊覧船事故対策検討委員会」議事概要

日 時：令和4年12月22日（木）14:00～16:00

場 所：合同庁舎3号館4階 幹部会議室

出席委員：山内委員長、河野委員長代理、安部委員、梅田委員、河野康子委員、  
小松原委員、庄司委員、高橋委員、田中委員、中山委員、眞嶋委員、  
南委員、渡邊委員

議事次第に沿って、事務局から資料の説明を行い、旅客船の総合的な安全・安心対策（案）については、原案通り了承された。主な意見は以下の通り。

### 1. 運輸安全委員からの経過報告について（報告）

- ハッチカバーだけから浸水した状態では、船舶の浮力と重力がバランスしていたということは、偶然窓ガラスが割れなければ、そのまま浮いていたということになるが正しいか。
- 沖から岸への波高約1mの追い波がある状況で、安全に避難港に入れたかどうか検討すべきではないか。あらかじめ訓練を行っておくことが重要ではないか。
- 船が沈まなかった、又は救命いかだに脱出できたとして、沖から岸への波で流されるため、アンカリングを適切にしなければ岩礁に打ち付けられて被害は出たのではないか。
- 技術検討会で安全基準を検討するに当たっては、JCIの検査員の裁量の余地がないよう、明確な基準を作る必要がある。

### 2. 旅客船の総合的な安全・安心対策（案）について

- この報告書は、非常に分かりやすく、そして実践でどういうふうに行うかということを考えて上で書かれている。
- 利用者の立場からも充実した対策内容と理解。旅客船に関わるステークホルダー全員が役割を果たすことで、安全で楽しい旅客船を再構築し、今回の事故で広がった社会の不安の払拭につなげてほしい。
- 犠牲になった方々と御家族の無念の思いに応える方法は、二度と同様の事故を起こさないことに尽きる。対策は、関係者のみならず広く社会に周知広報し、着実に実行してほしい。
- リソースが限られる中、対策を効果的に実施するため、急いでやるべきこと、2～3年をかけて進めること、事業者の協力を得つつ進めることなど、強弱の付け方に留意が必要。フォローアップ会議もスケジュール管理の目安にしてほしい。
- 今後も設備の更新や法令の見直しなど、継続的な取組が必要となると考えるが、事業者の声を拾いつつ、官民が連携して対策を進めてほしい。
- 事故後、観光船を不安視する声が大きいため、安全性の星マークなども導入することで、ルールを遵守し無事故で運航する事業者を適切に評価してほしい。

- いかにも優れた対策であっても、関係者がこれを守ることが大切。シーマンシップや安全についての意識向上が何より重要。
- 事業の規模、船の種類、気象・海象等は異なるが、安全な運航をし、人命を失わせないということは全ての事業者において必ず共通する事項。対策の実施に当たって、難しいこともあると思うが、地域ごとの協力体制など、関係者が協力して、それぞれの取組を発展させてほしい。

以上